

顔

「令和」発表時の墨書を揮毫した

茂住 菁邨さん 63



撮影・吉川綾美

自分がどんな姿勢で筆を持ったかの記憶がない。同席していた人に後で尋ねたら中腰だったと。数日前には万一書けなかつたらと怖くなって逃げ出したくなった。「新元号を伝えるのが自分の役目」と思い直し、前日墨をすり始めて覚悟はできたが、それでも緊張は極に達していたようだ。

大東文化大経済学部に入った。部員が当時300人を超す書道部に入り「負けたくない」の一心で稽古に励むうち書が好きだと気付いた。在学中青山杉雨(さんろう)入門。書道部長に選ばれ、前任者の退職であいた内閣府の辞令専門職に就職できた。展示会の出品作では主に古代文字を扱うが、仕事では初唐ふうの楷書がもっぱら。月平均1000枚を数える辞令類を同僚1〜2人とこなす。長嶋茂雄巨人軍終身名誉監督らの国民栄誉賞賞状なども担当した。

岐阜県飛騨市生まれ。本名・修身。内閣府大臣官房人事課勤務。書家。日展会友。

「令和」では「令」の終画などが独特の書きぶり。「ハネではなく、筆を上げて止める青山先生に学んだ筆法」と言う。辞令類の揮毫には加筆を防ぐため隙間なく書くといった決まり事があるなか、新元号では個性も少しのぞかせた。新時代のイメージを書で表し終えて「皆さんにいい感じで受け止めていただけたのが何よりうれしい」。(編集委員 菅原教夫)